

『長谷寺験記』における 坂上田村麿説話について

大 橋 和 華 *

Tales of Sakanoue Tamuramaro in "Hasedera Genki"

Waka Ohashi *

はじめに

『長谷寺験記』は奈良県桜井市初瀬にある長谷寺が本尊十一面観音の布教のために十二世紀から十三世紀初頭に寺内外に伝わる靈験譚を寺側の立ち場で集め整理したもので、当時全国で活躍していた勸進聖と呼ばれた布教僧たちの説教講話のマニユアル的な役目を果たと共に、又それらの僧達の活躍によって成長した仏教説話集であると言われている⁽¹⁾。

さて、長谷寺の十一面観音に対する信仰は『蜻蛉日記』や『更級日記』に見える「長谷詣で」の記事や、『日本霊異記』に見える靈験譚から考えても、かなり早くから巾広く、熱烈なものがあつたと思われ、それらがどのような形で、この中世初頭の説話集に集約されているか、又、その信仰の実体がどのようにに所収説話の中に見えかくれているかなど興味の尽きないものがある。

中でも新長谷寺に関する説話は、直接、寺の勢力伸長にかかわる布教の歴史が説話種となっているもので、十一面観音信仰の拡大の様相を示す興味深いものである。今回は新長谷寺に関する説話の中から、坂上田村麿伝説とからんだ下巻第五話の「田村將軍得馬勝軍建立新長谷寺事」について探ってみる。

一 『長谷寺験記』下巻第五話の問題点

『長谷寺験記』（以下『験記』と略す）の新長谷寺に関する説話は、上巻第九話「唐大梁祖取國位建立新長谷寺」と下巻第一話「當未建立前歸此山者成所願事付諸人得益事」と本話の計三話であり、上巻第九話は長谷寺の勢力が日本国内のみならず唐国にまで伸びたことを語る宋州岩山の新長谷寺、下巻第一話は、寺は勿論のこと、観音も「顕レタマハザル前一百年バカリ」に、すでに初瀬の十一面観音は靈験あらたかであったという信州更級の新長谷寺の話である。

ここで問題にする下巻第五話の新長谷寺説話は、「延暦十六年坂上田村麿が東夷征伐の宣旨を蒙り東国へ向かう折、長谷寺に参詣して軍安穩を祈り下山したところ、長谷寺清浄坊の僧より葦毛の馬が届けられ、翌年その馬に乗って出陣する。馬は山を飛び海を走り、手綱を執るまでもなく、射らるる矢を避けて田村麿を戦勝に導く。戦い終り陸

* 人文系列 (Department of Liberal Arts and Sciences-Literature)

奥国三ノハザマに来るや突如馬は死に、馬の墓が光を放つのを怪しんで掘ってみると、馬は十一面観音であった。」とするものである。

田村麿がここに建てた寺が三ノハザマの新長谷寺であるが、この説話には三つの問題点があるように思う。一つは清水寺を建立し観音を祀った田村麿の説話が何故「清水観音霊験譚」でなく、『験記』に「長谷観音の霊験譚」として採られているのか。二つは田村麿の軍馬説話が、他の種々の田村麿説話の中でどう位置づけられるのか。三つは説話後半に「凡田村ハ彼ノ寺ト同時ニ奥州ニ寺ヲ立ルコト六箇所。同十九年六月十六日同時ニ彼ノ六箇寺ヲ供養シケルニモ。田村六所二分身シテ同時供養ノ會場ニ着座シテ聴聞ヲゾ遂ラレケル。」とあり、他の新長谷寺説話に於ては一新長谷寺を建立しているのに対し、この田村麿による新長谷寺説話だけが三ノハザマの新長谷寺の他、六ヶ寺を建立しなければならなかったという特異性である。これらの点について考えてみたいと思う。

二 畿内に於ける田村麿説話の様相

まず、この「田村麿の軍馬」の話がどのように形成されたか見るために畿内の様相を探る。

①「田村麿薨伝」と『田村麿伝記』の頃

坂上田村麿（七五八年～八一一年）が亡くなった直後、実際に田村麿を知っていた人が生きていた時代に田村麿がどのような人として人々にとらえられていたかは『日本後記』嵯峨天皇弘仁二

年五月廿三日条に見える「田村麿薨伝」と嵯峨天皇御制と伝える『田村麿伝記』（『群書類従』第五輯所収）によって知ることが出来る。前者は六十余字、後者は六百余字で、後者の方がや、詳しく、修飾も多くなっているが、共に帰化人阿智王につながる苅田麿の子であることを説く出自に始まり、征夷大將軍としての業績を述べるに終っている。これらの資料の妥当性については、嵯峨天皇御制の是非など問題はあまるものの⁽³⁾、共にその形容に「赤面黄鬚・勇力過人」といった同じ表現が現われる等、ほぼ同時代のものであることは疑いを入れない。これが九世紀前半頃までの畿内人の田村麿認識といていいだろう。

②『清水寺縁起』を中心とする古代説話集の頃

次に田村麿説話として我々の目に触れるのは、十一世紀前後の説話集に見られるものである。この時代の畿内の人々に知られた田村麿像は『清水寺縁起』の影響下にあるもので『扶桑略記』（延暦十七年七月二日条）、『今昔物語集』（卷十一ノ卅二話）、『帝王編年記』（延暦十五年三月の条）等々に採り上げられる田村麿説話などであるが、これらは元をただせば全て『清水寺縁起』に端を発するものである。

『清水寺縁起』は現在、大学頭藤原明衡（九八九年～一〇六六年）作とされるもの（『新校群書類従』所収）と、作者不明の、前述のものよりや、説話として成長した、長文のもの（『続群書類従』所収）の二つが知られているが、いずれにも東夷征伐の折の軍馬説話は見られない。特に後者は十二世紀初頭の『今昔物語集』が卷十一ノ卅二話に引いた出典と考えられるものであるが、

『今昔物語集』の引いた部分の少し後に、『清水寺縁起』は田村麿東夷征伐の記事を次のように載せている。——首途之日。將軍語延鎮云。我奉勅所遣夷地。露命草身死生只在大師誓願之力乞也。……中略……東國平定。將軍京上。越會坂關入華之夕。先拜觀音。次謁延鎮云。愚夫依上人祈已平亂再入京都。流淚歡喜。——即ち田村麿は出征の折、共に清水寺を建てた延鎮を通して清水の觀音に祈願し、無事に東國平定を終えているのである。

私寺として清水寺を建立し、十一面觀音を祀った田村麿である。東征の折も当然清水の觀音に祈ったとするのが当時の畿内の人々の常識であったものと思われる。『扶桑略記』と並んで、思いがけない当時の稀覯本から秘話を拾い上げる大江匡房の『江談抄』にも田村麿の記事は前記嵯峨天皇御製の『田村麿伝記』を拾っているのみである。こうしてみると『験記』のまとめられていた一二〇〇年頃までの畿内に田村麿軍馬の説話は存在しなかったと思われるのである。

③ 中世小説の頃以降

ところが中世小説の頃になると様相は一変する。お伽草子の『田村の草子』『鈴鹿』を初め、謡曲・幸若舞・古浄瑠璃・神道集等々、田村麿軍馬説話の系列に並ぶと思われる賊退治の話が続出するのである。賊の名前は太竹丸（大嶽丸）・高丸・悪路王・立烏帽子などとさまざまであり、その居を構える場所も鈴鹿山・奈良坂山・近江・信州から陸奥国田谷窟まで、バラエティーに富んでいるが、結局それらは清水觀音の靈驗譚とつながっているものが多く、中には鞍馬寺の毘沙門天とつながるものもある（四）。

1 表 『田村の草子』による中世小説の展開

	①	②	③	④	⑤
誰が	俊仁將軍 (その折、田村の郷※1の女とちぎり、田村丸誕生)	田村丸 (坂上俊宗)	田村丸 (坂上俊宗)	田村丸 (坂上俊宗)	田村丸 (坂上俊宗)
何を	陸奥国高山の悪路王	奈良坂山のりょうせん※2	伊勢鈴鹿山の太竹丸 (大とうれん、小とうれん、けんみょうれんの三剣のうち、けんみょうれんを奪えず。)	近江の高丸 (高丸は信濃・駿河に逃れ海を渡る。田村丸は帰ろうとするが)	けんみょうれんに鬼魂があり、陸奥国霧山嶽※3に復活した太竹丸
何の助力で			天女鈴鹿御前 (田村丸は鈴鹿御前とちぎり女子誕生)	鈴鹿御前 (神通車音楽鎗矢で援助)	鈴鹿御前 (俊宗…名馬鈴鹿…飛行の車)
何の化身	田村丸俊宗…觀音の化身 鈴鹿御前…竹生鳥の辨財天				
備考	1 最後は清水觀音縁起で終る。 2 ※1は「むつの国はつせの郷田村郷」※2はりょうせん征伐後17歳で將軍となり「むつの国はつせの郷」に錦を飾る。 3 ※3 霧山は達谷窟の戌亥方12.3里、高丸・悪路王の住窟と言う（『平泉雜記』）				

これら中世の田村麿説話の中から、こうした諸説話の集大成とも見える『田村の草子』を通して中世末期の説話様相を説明したいと思う。

この表は『田村の草子』のあらすじに添って説話を整理したものであるが、何と五つの田村麿賊退治譚が次々に登場するのである。この現象は中世に入って出現した田村麿の賊退治説話が中世末頃には、鈴鹿山や奈良坂山など古来旅の難所と言われていたような所に伝説として語られる状況が出来てきており、それらは地域の信仰とも結びついていたようである^(註)。当時の人々が『田村の草子』をまとめるためには、あの話もこの話も田村麿の話だという状況の中で、席を温める暇も無く田村麿を次から次へと賊征伐に行かせる話が形成されたものと思われる。その中の一つとして、『駿記』に見られる東北地方の田村麿による賊退治譚(表Iの⑤)も取り上げられ、その中には当然、軍馬説話の根拠も残しているのである(表の⑤波線部参照)。

三 東北地方の田村麿伝説

次に東北地方の様相を見ることにする。

①東北地方の田村麿伝説

東北地方は田村麿東夷征伐のお膝元であるだけに、あらゆる地方に田村麿伝説が分布しており、その現れ方も、田村麿が軍士を整え^{たむろ}営した所だから、「^{たむろ}営岡」(宮城県栗原郡三迫八幡町)、田村麿が東征の時、馬をつないだから「駒繋ぎの松」(秋田県雄勝郡)といった調子で、その伝説は田村麿の足跡を離れ、あらゆる場所・事物に渡っている。又、中世小説の影響か賊(大嶽丸、阿黒王、赤頭、高丸、悪鬼、蟹など種々)退治にまつわる伝説も多く、そ

うした伝説を持つ神社仏閣等も北は青森県から南は福島県まで東北地方全土に広く分布している^(註)。

こうした東北地方の田村麿伝説の中で、時代を明確にしているものを三つ紹介したいと思う。一つは鎌倉末期頃の伝説をとどめている『吾妻鏡』である(文治五年九月(一一九四)条)。その本文は、

・廿一日戊寅於伊澤郡鎮守府令^レ奉幣八幡宮瑞籬給。是田村麿將軍為^レ征東夷^二下向時。所^レ奉勤請崇敬之靈廟也。彼卿所^レ帶弓箭并鞭等納^二置之^二于^二今在^二寶藏^一。

・廿八日乙酉…前略…御路次之間令^レ臨^二青山^一給。被^レ尋其号之處田谷窟也。是田村麿利仁等將軍奉^二綸命^一征夷之時。賊主惡路王并赤頭等構^レ塞之岩屋也。其嚴洞前途至^二于北^二十餘日。鄰外濱^一也。坂上將軍於^二此窟前^一建^二立^二九間四面精舍^一令^下摸鞍馬寺安中^一置多門天像上。号^二西光寺^一。…後略…。

今一つは江戸時代安永年間の『平泉雜記』(相原友直著・『南部叢書』所収)「田村將軍建立堂社」に見える二十一社(1鎮守八幡(岩手胆決・吾妻鏡廿一日条に見える)2達谷窟毘沙門堂(岩手西磐井・吾妻鏡廿八日条に見える)3斗蔵観音(宮城伊具)4白山社(岩手江刺)5悪玉観音(宮城仙台)6松島五大堂(宮城宮城)7富山観音(宮城宮城)8塩竈社(宮城加美)9篋岳観音(宮城遠田)10和淵神社(宮城桃生)11牧山観音(宮城石巻)12大武観音(宮城登米)13八幡宮(宮城栗原)14清水観音(宮城栗原)15小迫観音(宮城栗原)16長谷観音(宮城登米)17鱒淵観音(宮城登米)18矢作観音(岩手気仙)19小友観音(岩手気仙)20猪川観音(岩手気仙)21五葉山神社(岩手気仙)」と、そこに引

かれています『封内名跡志』（按るに、田村麻呂の観音に於る所閣を建てずといふ事なし。是を名附るに多く長谷を以す。田村麻呂の信じたる所は蓋し山城清水寺の観音也。後人田村麻呂の信ずる所の事実を弁せず、妄に田村の建といへり、尤も疑ふべし）である（傍点は大橋）。

これらの資料は、鎌倉末期にすでに東北地方にお伽草子的な悪路王・赤頭という賊を退治する話が鞍馬寺の毘沙門天と結びついた形で語られていた所（達谷窟・西光寺）があったこと、又、十八世紀の中頃には田村磨建立の観音が多くあり、それらの観音のうち長谷観音と称するものの中でも多かったことが知られるのである。

それにしてもこの二つの文献の間にはあまりに大きな年月の隔たりがあり、それを埋める第三の資料が欲しいのである。たまたま過日、この二つの資料の空間を埋めるに足る口頭伝承の資料にめぐり会い『芸文東海』一四号（一九八九年）に報告したが、この華足寺（鱒淵観音）所蔵の『風土記』に記載されていた武州中野の宝仙寺の僧の手紙（一六四〇年）を「第三の資料」としてはさんで、東北に於ける『験記』の軍馬説話及び長谷信仰について話を進めたい。

②東北に於ける『験記』型田村磨伝説

長谷寺は全国に百寺以上が数えられ、その中でも東北地方は特に長谷寺の多い地方と言われている。現在の数多い長谷寺のうち『験記』の三ノハザマの新長谷寺があるかも知れない、そんな軽い気持ちで東北の寺々を調べているうちに、東北に於ける

『験記』説話の一つに巡り合うことになった。一六二二年、宮城県登米郡鱒淵村の竹峰山華足寺に泊っていた僧が里の年寄り二人から聞いた伝説である。この僧が一六四〇年に鱒淵村の村役宛に送った手紙にこの伝説をした、め、それが村の『風土記』に記載されて華足寺に残っていたのである。詳細は『芸文東海』十四号の翻刻を見てもらうこととし、必要な部分だけ述べれば、時代の波をかぶったのであろう、御伽草子ばりの「鈴鹿御前の手引きにより、鬼神、大たけ」を退治する話」になっているのであるが、大筋は『験記』そのまゝであり、相違点といえば、馬を田村磨に渡す長谷寺清浄坊の上人が「くもゐの坊」となっている他、戦い終り馬の死んだ場所（馬を埋めた場所）が三ノハザマの新長谷寺でなくて「華足寺」、墓が光を放つのを不思議に思い掘ってみると十一面観音ではなく「金色の馬頭観音」であったという程度である。

この手紙には『験記』に「同時に六ヶ所の長谷寺を建立」したとある部分にあたる寺の名前が記されて居り、この手紙を手がかりに『華足寺縁起』（元禄十五年。この手紙がもとになって出来た縁起か）、近隣の金成町小迫、楽峰山勝大寺の『正大寺縁起』（承応三年）等を比べ、十七世紀頃の東北地方で、「三ノハザマの新長谷寺及び同時に田村磨の建立した六ヶ寺」と思われていた寺の輪郭がほぼ判明した。三つの説話及びその寺名には多少ずれもあるが、整理すればⅡ表の如くである。表中に丸囲みで入れた文字は、伝説で観音の建てられた所に埋めてあるとする賊の死体部所である。

Ⅱ表

宝仙寺僧の手紙に ある慶長一七年 (一六二二)の伝説	大たけの観音 ⑨	ののたけ⑥	みなと牧山	水越のはせ	ひるかのおばさ ま	鱒淵の華足寺	南部三戸ひとは す	(※七寺には 鬼神の党類が 埋められてい るとするは三 書に共通)
華足寺縁起 (一七〇三)	遠田篁峰	牡鹿牧山	登来舎那	迫金成	竹峰山	南部一蓮	栗原竹林	
正大寺縁起 (一六三四)	篁峰	湊津牧山	水越長谷	小迫	鱒淵華足	南部三間	富山観音	
観音の 種別	十一面	十一面	十一面	十一面	馬頭	千手		
現寺名・住所	大嶽山興福寺 宮城県登米郡南 方町大嶽一九	無夷山篁峰寺 宮城県遠田郡涌 谷町篁岳神楽岡	両峰山梅溪寺 宮城県石巻市湊 牧山八	遮那山長谷寺 宮城県登米郡中 田町浅水	楽峰山勝大寺 宮城県栗原郡金 成町小迫	竹峰山華足寺 宮城県登米郡東 和町米川	不明	富春山大仰寺 宮城県宮城郡桜 島町富山

この表について少々説明を加えてみる。

⑦『華足寺縁起』には大嶽観音の代りに栗原竹林(所在不明)が、『正大寺縁起』には大嶽観音の代りに富山観音が掲げられ、南部一蓮寺は三書に共通していたが現在の所在を確認することが出来なかった。

⑧丸囲みの死体埋葬地については、現代、奥州三観音と呼ばれる富山・牧山・篁岳に賊のそれぞれ首・胴・肢体を埋めたという伝説もあり⑨、また、奥浄瑠璃『田村三代記』(『仙台叢書』所収)には篁岳に首、牧山に胴、富山に足、大嶽に手を埋めたとする江戸時代の伝説の一つも残っている。

⑨篁岳観音は篁岳の神楽岡にあり、『義経記』、『元亨釈書』延鎮伝等に見えるアクジの高丸・赤頭を伐ち取った場所が神楽岡とされているところから見ると、これらの説話には篁岳観音の伝説が入っているらしい。

⑩現在の所在を掴めなかった南部一蓮と栗原竹林は知らず、この二寺を除く全ての寺の境内に白山神社があった。

⑪表中に長谷寺が「水越のはせ」一寺であること、また、本尊が必ずしも十一面観音ではないものもあることについては、寺の寿命が関係しているらしい。ある寺が衰えると、近所に出来た新しい寺が伝説だけ受け継ぐこともあったらしいし、同じ寺であっても宗派や寺名を変更することは珍しくなかったと言う。本尊も火災などに会って焼失すると前と同じものが建立されるとは限らなかった⑫。

⑫田村磨建立伝説を持つ寺の多くがその年代を大同二年とし、

延暦年間とするものもある。これは田村麿の征夷大將軍としての業績や京都清水寺建立の年代をにらんでの伝説であろう。又、田村麿の建立と言いながら寺の草創をそれ以前とする寺も少なくない。

四 長谷寺信仰と田村麿の軍馬説話

『験記』に於ける「田村麿の軍馬説話」を見る時、二つの点を述べなければならないように思う。一つは田村麿の軍馬説話の生成であり、次は長谷寺靈験譚への生長である。

① 田村麿の軍馬説話の生成

田村麿の東夷征伐が行われた延暦年間以来、東北地方にはありとあらゆる田村麿伝説が出来上っていったものと思われる。石のある所には「田村麿の腰かけ石」の伝説が、杉の木のある所には「田村麿が鞭を表面に突き指したものが杉の木に生長」したという具合に。

田村麿の軍馬の伝説は、南部馬を産した青森県八戸など各地に生じたが栗駒嶽の辺りにも生じた。私が三ノハザマの新長谷寺に比定できるのではないかと考えている清水寺（田村麿の霊夢により観音勧請との伝説を持つ。宮城県栗原郡栗駒町岩ヶ崎）のある三ノハザマ岩ヶ崎も馬の市の立つ所であった⁽³⁰⁾。この地方が名馬の産地であることは中世には自他共に認めるところとなっていたらしく、十二世紀の『平家物語』に壽永二年五月十二日秀衡が木曾殿へ龍馬二匹を奉り「白山ノ社へ神馬ニ立ラル」とあったり、

十五世紀の『源平盛衰記』卷卅六に「義経が乗タル大鹿毛ハ陸奥國ニテ名ヲ得タル氣高逸物也」等とあったりする。この名馬の産地の馬の伝説にのって出来上ったものが、田村麿の軍馬説話であったものと思われる。

② 長谷寺靈験譚への生長

東北に於ける田村麿建立社寺は実際に田村麿が建立したというより、すでに存在した社寺が田村麿伝説を取り込んだという形態の感じられるものが多いことを述べた。弘法大師伝説圏にある事物が全て弘法大師とか、わりを持ったり、武田信玄伝説圏にあつては、事物のみならず、正月の門松の行事なども信玄の上京に結びつけるというのが、伝説のあり方である。東北の田村麿伝説圏にあつては、さまざまな社寺が田村麿伝説を縁起・その他に取り込んでいっても不思議はない。

しかし、ここでさまざまな社寺のうちで、何故か田村麿伝説を持つものに長谷寺と名付けられたものが多いというのは『験記』説話との関係で注目されるのである。ここで、ささやかな試論にすぎないが、私見を書き留めたいと思う。それは表Ⅱの説明で触れた白山信仰に関するものである。十六・七世紀の伝説を基盤として話であり、東北地方に於ける中広い白山信仰の広がりや考えると、暴言の誇りを免れないかとも思うが、現存する社寺の確かな歴史が辿られるのは有名寺社といえども伊達家の支配下に入ってからというものが多く、ましてや白山信仰の東北での全体像が浮き掘りにされる日はこれからの研究の成果に待たなければならぬ。こうした状況の中で小さな一石の波紋となることを

願って書き止める。

表Ⅱの「長谷寺験記型田村磨軍馬伝説」を持つ寺々全てに白山神社のあったことは表の説明の中で既に述べたが、『験記』の中にも上巻第十一話の付として注目すべき白山信仰の説話がある。

『長谷寺験記』は上・下の二巻から成り、上巻は寺に伝わる資料から、下巻は在野の伝説等から説話を拾って作られたことが序に述べられている。このことは『験記』上・下巻の説話の質のや、異っていることを示しているものと思われ、下巻第五話の「田村磨の軍馬説話」のような下巻にあるものは、多分地方（ここでは東北）の伝説を単純に布教活動の中で吸収したものと考えられるが、上巻にある説話は長谷寺の歴史の中で重要な意味を持ち、又、そうした意図を持って『験記』に取り上げられ、並べられたであろうと思われるのである。

上巻第十一話「天神成神後居住當寺被拔悪心業事付白山御影向事」に述べられる白山説話を概述すれば「天禄二年（九七二年）、長谷寺勝永房の阿闍梨行圓が白山で念誦の折、やはり白山詣でに来て同所に籠っていた下主男に白山の神が憑き、長谷へ所を構えて引いて欲しい旨、行圓に頼むのである。その白山の願いを聞き、行圓は白山の神霊である鏡を袖に迎え、長谷寺境内に白山を祀ることになる」とする説話である。

この話は北野天神が神となった後にも、苦を祓うために長谷観音に帰依し、長谷境内に天神の居所を構え祀ってもらうことになる話の後に、「付」として入っている。こうした話が『験記』の中へ入ってくるということは、ある時代に、天神信仰・白山信仰

が長谷観音信仰の中に組み込まれた、少くとも、長谷寺側としてはそうととてもいいと考えられる状況があったのではないかとと思われるのである。

そしてその時期は、白山信仰の場合に於ては「付」として付け加えられていることからすれば、上巻十九話・下巻卅三話の目次構成が出来上ってからの『験記』編纂の仕事が後半に入った頃だったのではないかと想像をしても見たのである。『験記』上巻十一話「付」の本文冒頭の天禄二年という説話の年時設定は、白山信仰を「仏教の中に組み込む説話」で要の人物となっている泰澄（六八一年～七六七年）に関する説話、『泰澄和尚伝記』の成立が天徳二年（九五六年）或いは元年とされていることを視野に入れていることかとも考えたが、こちらはまだ謎に包まれているようである^(三)。

最後に東北に於ける行事の中にも白山と観音の関係を考える上で鍵の一つとなるものは残って居り、月光善弘氏は東北地方の白山信仰が十一面観音と深い関係を持っていることを述べられ^(三)、国分寺年中行事手引に「尼寺の観音は白山権現の奥の院なる故に白山宮より尼寺まで廻廊有之」とあり、白山宮前で観音経を誦した後、廻廊を通して尼寺の観音に参詣するのが一山古来よりの規式であった旨が書かれている（傍点は大橋）。私が今度の調査の中で実際に聞いた話の中にも、例えば華足寺の千田住職は「華足寺は馬頭観音で有名なお寺であるが、白山権現の方が先に祀られているので、観音を祭る時には先に白山神社のお祭をしてから始めないと崇りがあると代々言われている」と語られ、又、表Ⅱ

の十七世紀頃の七寺中、ただ一つ「長谷寺」の名を書き留められている遮那山長谷寺も、まず神護景雲二年（七六八年）釈道上人によつて加賀の白山権現を觀請し、遮那山法誓寺を建立、次に延暦二十年田村磨蝦夷征伐に長谷寺祈願により平定出来たことから、延暦二十二年大和初瀬の初瀬山長谷寺を觀請し、大同二年長谷寺觀音院を建立したとの縁起を持っている。この寺が觀音化身の軍馬伝説を持っていることは言うまでもない。又、古い歴史を誇り、現在も篁岳に多くの僧坊を持ち威容を見せている篁峰寺の『一山記録帳』の縁起書には、「光仁天皇の勅願で宝龜元年の草創、白山宮を觀請し、坂上田村磨東夷討伐のち十一面觀音を建立して霧岳山正福寺と号したが、嘉祥年中慈覺大師円仁が中興して無夷山篁峰寺尊常住院と改め、弟子尊常をして住院せしめた」とあり、いずれも白山觀請の後に觀音を觀請したとの伝を見せている。尚、時代は新しいが前述の佐藤信要『封内名蹟志』（二七四一年）に、篁峰寺の白山社について、「堂（觀音堂を指す）の南東にあり、光仁帝宝龜元年の建立にして一山の鎮守なり、九月二十七日を以て例祭とす、毎年神事を行う、郷人此地の由来を知らず觀音堂を以て本社とし、白山社を属社として祭る、此類猶多し、所謂宮城の国分薬師、牡鹿の牧山觀音、栗原の小迫觀音等のごとき白山の社あり、皆本社を義を失つて仏閣を以て地主として祭祀をなす、郷人其本末を弁じ祭祀を行いなば、神徳顯然としていちじるしかるべきものか」と、にがにがしい思いを述べている。これらも、東北地方に於て、白山信仰の上に觀音信仰が乗って拡まったことの痕跡と言えるのではないかと思う。

終わりに―結論として―

偏見に満ちた試論に過ぎないが、結論として次のことが言えるのではないかと思う。

田村磨東夷征伐に関する説話圏は東北地方であり、「田村磨軍馬説話」も東北地方の名馬を産する地方の伝説を母体にして生まれた。十二世紀頃までに東北地方へも長谷寺信仰は広まっていたものと思われるが、その時「田村磨軍馬説話」が長谷寺靈験譚にとり込まれることになったのである。長谷寺の十一面觀音信仰はすでにあつた何らかの信仰基盤の上に乗ったと考えると都合の良いほどのスムーズな展開を見せ、十二世紀後半『験記』編纂に際して新長谷寺の話を収録する段には、他六ヶ寺に筆を伸ばさねばならない程の有力な長谷寺が多数出現していたのである。こうした長谷寺信仰の東北地方浸透に『白山の記』（二一六三年、『史籍集覧』他所収）の冒頭に語られる「白山大明神が正一位白山妙理大菩薩であり、その本地が十一面觀自在菩薩である」とする白山信仰がかかわっている可能性が考えられるのである。

このように長谷寺靈験譚の中にくりこまれた「田村磨軍馬伝説」ではあつたが、中世小説の素材の一端として畿内へ入った時、田村磨と清水寺の関係を切りくずす程の力はなく、長谷寺に関しては、表Ⅰ※印1・2の如く、「田村郷はつせ」とかすかな痕跡を留める程度に終わっているのである。中世小説の洗礼を受けて後、東北へ逆輸入された形の『田村三代記』などがすっかり「清水寺靈験譚」になってしまっているのは言うまでもないことであつた。

注

- (二) 永井義憲「勸進聖と説話集」(『国語国文』S 28ノ11) 他
- (三) 高橋崇「坂上田村麿」吉川弘文館(S 34)・板橋源「坂上大宿 禰田村麻呂考」(『岩手大学文学部研究年報』第一〇卷一九五六年) 等参照
- (三) 大塚徳郎「坂上田村麿伝説」(『古代文化』第二卷ノ六、山本吉左右「日本架空伝承人名辞典」坂上田村麿の項(一九八六年)等参照
- (四) 『吾妻鏡』『神道集(諏訪明神秋祭ノ事)』『神明鏡』等は『鞍馬寺』の毘沙門、『験記』にも「田村モ毗沙門ノ化身」とある。
- (五) 大西源一「鈴鹿の山賊と田村將軍鬼退治の伝説」(『芸文』T 15)
- (六) 「坂上田村麿伝説」歴史研究室(『青森県師範学校校友会郷土号』S 8) 武藤鐵城「田村麿傳説集覽」(『瑞末』S 16春季号)
- (七) 石田茂作「長谷寺の沿革と其の文化財」(『大和文化研究』第五卷第二号)の杉岡美佐子作製「全国長谷寺地名表」では百五ヶ所。高橋富雄「大和長谷寺と東北長谷寺―長谷寺信仰の心をさぐる―」(『パシフィック』「家庭と電気」一九八三年一〇月号)では東北地方だけで三十八寺。
- (八) 大塚徳郎「田村麿伝説」(『古代文化』第二卷第六号S 33年)
- (九) 例えば、林観音(宮城県岩沼市押分・白山姫神社境内にあり)は朝日山梵天寺といひ元禄年間千手観音を安置したが焼失廃寺となり、現在は宝暦二年建立の正観音である。元禄以前の寺の様子は不明である。伝説として、大同二年田村將軍の蟹退治伝説を持つ。『岩沼の民話』・『岩波市史』より。
- (十) 県別シリーズ『郷土資料事典』観光と旅(宮城県) S 45年刊
- (十一) 下出積興編『白山信仰』(S 61) 所収の下出氏他浅香山木氏等の諸論文
- (十二) 月光善弘「東北における白山信仰について」(『宗教研究』三七ノ二S 39)